

モントレイ・アワビ物語 ～ 太平洋にかかる橋

ティム・トーマス

(水産史家/モントレイ-JACL ヘリテージセンター学芸員)

モントレイとアワビは切っても切れない長い歴史を共有している。日本人をモントレイに導いたのはアワビであり、アワビで得た資金が日系アメリカ人市民同盟 (JACL) 会館とモントレイ埠頭を築いた。しかしこの物語は、日本人が到着する以前から始まっていた。

何世紀も前、モントレイの先住民であるラムセン・オローネ族が初めてこの美しい巻貝を求めて湾に潜り始めた。食料のためだけでなく、より重要なのはその美しい虹色の貝殻だった。釣り針やシャベル、ボウルなどの道具となり、籠の装飾や宝飾品の材料として用いられた。さらに重要なのは、彼らがアワビで他の先住民グループと交易し、モントレイでは入手困難な黒曜石 (矢じりなどの材料) などを得ていたことだ。アワビ (abalone) という言葉も、モントレイ湾で主流のアカアワビを指すラムセン・オローネ語「aulun」に由来する。

1850年代初頭のある時期、「アワビラッシュ」が起こり、中国人たちが私たちの海岸に流れ込んできた。当時の中国では、労働者階級がアワビを採ることは禁じられていた。中国人は潜水漁ではなく、干潟での採集か、小型船で箱メガネと長いテコを用いてアワビを採るだけだった。

1890年代後半、当時モントレイで太平洋改良会社の労働請負業者として働いていた野田音三郎と井田百太郎の強い要請を受け、日本政府は千葉県の下物・塩アワビ業で名高い小谷家出身の小谷源之助を派遣した。小谷は現地の漁業状況に感銘を受け、間もなく日本人アワビ漁師たちが次々と渡米。モントレイ湾の深冷海域でアワビを商業的に採取する新技術と手法をもたらした。当時、アワビ市場は州内にも存在せず、日本人ダイバーがモントレイ湾から採取したアワビは主に日本と中国向けだった。

1908年春、ドイツ人レストラン経営者「ポップ」アーネスト・ドルターがアルバド通りの店でアワビステーキを考案した。この発明により「ゴム長靴を食べているようだ」と評された食材は国際的な美食へと変貌し、ポップは「アワビ王」の称号を得た。

1913年、日本人アワビ漁師にとって決定的な年となった。カリフォルニア州が乾燥アワビの州外出荷を違法化したのだ！これが彼らの生計手段だった。日本人漁師たちはどうするつもりだったのか？同年、ポップ・アーネストは洗練されたサンフランシスコのレストラン「ホフ・ブラウ」でアワビ料理を提供する仕事を得た。1915年にサンフランシスコで開催されたパナマ・パシフィック国際博覧会で、ポップのアワビステーキが世界に紹介された！すぐに誰もがそれを欲しがらなくなった。

1908年に考案されたこのアワビステーキのレシピのおかげで、1916年までに60万ポンド (約272トン) 以上のアカアワビがモントレイ埠頭で水揚げされた。1920年までに埠頭では9つの日本人アワビ潜水会社が操業し、1929年にはカリフォルニアのアワビ産業が約100万ドルの収益を生み出した。その75%は日本人潜水士によるモントレイ湾産だった！第二次世界大戦前には埠頭の事業の大半が日本人所有となり、モントレイは真に世界のアワビ首都となったのだ。

私は2006年、このモントレイ・アワビの物語を追って南房総への訪問を始めた。驚くほど多く、物語の痕跡を発見したのだ！その後何年にもわたり日本を訪れるたび、常に新たな発見があった。当時、千葉県立安房博物館 (現 渚の駅たてやま博物館) で開催された「食と美のアワビ」展では客員学芸員として携わる貴重な機会を得て、ポップ・アーネストの物語を日本に紹介した。

モントレイに渡ったアワビ漁師の自宅を訪ねると、どの家にもモントレイ湾産の巨大なアカアワビの殻が居間に誇らしげに飾られていた。ダイバー川上長松の家には、ガラスケースに入った青い目の人形があった。この人形は彼の最愛の娘への贈り物として1927年モントレイのデパートで購入されたものであり、今も家宝として大切にされている。現在プロの人形作家である川上の孫娘は祖父に敬意を表す人形を作り、それは今、JACLヘリテージセンターにある。

しかし「モントレイ万祝」を見た時は驚くべき新発見だった。モントレイ在住の私たちでさえ、その存在を全く知らなかったのだ。しかし、1898年に最初のヘルメットダイバー集団と共にモントレイへ渡った祖父を持つ栗原家から、世界でたった2枚しか存在しないこの品を受け取り、モントレイへ持ち帰って展示できるとは、まさに驚異だった！私たちはまさに、太平洋の架け橋となっているのだ！しかし真の架け橋は、出会った友人や同僚となった人々である。彼らは惜しみなく時間と研究を私に提供してくれた。私たちは共にその橋を渡っているのだ。



2025年10月 JACL モントレイ半島支部・ヘリテージセンターにて。前列中央がティム。



2025年10月 カリフォルニア州立自然保護区ポイントロボスの「コダニ・ビレッジ」近くの海岸。右端が、A・M・アーレンの孫の妻モニカ・ハドソン（ツアーガイド/作家/歴史家）。コダニ家の子孫やガイドらとともに。